

# 現代フランス三題噺

## —マルク・モーリスとの対話—

当研究所元理事長 下山 房雄

まえがき： 2005年9月21日成田発、11月20日成田着の丸二ヶ月間日本を離れて、私は南仏エクス・アン・プロヴァンスに滞在した。エクスはかつて3度、通算2年ほど暮らした小都市である。過去の3回は国立労働経済社会研究所への留学であった。4度目の今回は、仕事なしパソコンなしの滞在中、過去の留学過程で友達になったマルク・モーリスや細君フランソワーズとの旧交を、お二人の別荘に妻多美子とともに招かれ五日滞在中などして暖めもした。以下に掲載するのは、そのマルクとのメールやりとりの抄録（ただし若干の注※を付した）である。私信であるが、普遍的意味のある内容の部分を、かながわ総研会員の皆さまに紹介する。

なおマルクはフランス労働社会学の大家で（現在82歳、上記研究所の名誉研究員）、リオンからローヌ河を80キロほど下ったヴァランス出身。1944年夏に20歳の青春の血を燃やして、ヴァランスの東に遠望される高地ヴェルコールで闘われた対独レジスタンス闘争に参加した。全フランスから4000人のマキ（レジスタンス部隊）が当時結集した。この闘争は1944年7月21日に悲劇的に結末を迎える。来るはずの連合軍のグライダーは来ず、天空に現れたのは15,000人のドイツ軍兵士を乗せた黒逆十字マークのグライダーでありパラシュートであった。一つの詩がその光景を「みんな空からの救いを待ち望んでいた。しかし突如空からやってきたのは死であった」と描くごとくである。そのヴェルコールに、マルクたちの別荘がある。

ところで標題の「三題噺」は、フランスから帰国後の11月30日にマルク・モーリスあてメールで（S→M（30/11/05）として標示）質問した三つのテーマにかこつけてのもの。多少の解説をしておこう。質問テーマ第一は、私たちの今回滞在中におきたフランス都市近郊暴動に関連している。ハリケーン「カトリーナ」の惨害の報道が全世界を駆けめぐり、それによって形成された「海外での戦争に忙殺され国内統治もできないアメリカ政府」とのイメージを打ち消すかのように、「フランスの内乱」的イメージが全世界のメディアに流された。日本のテレビでも焼き討ち風景が繁く報道されたらしく、息子や娘から「お父さんお母さん、無事ですか」との電話がエクスにかかってきた。エクスにも、アラブ系の人々が多く住んでおり、街の人通りの中にスカーフ（ヘジャブ）を巻いた女性たちを見ることは珍しくない。このエクスのみならず、近くの大都市＝マルセイユも全く平静であった。マルセイユは、ジーン・ハックマン演ずるアメリカ刑事が市の内外を走り回る映画「フレンチ・コネクション」が描くような犯罪都市的特徴を持つ。私の二度目のエクス留学は、1991-92年で福岡の住民だった時だが、福岡・小倉の暴力団抗争とマルセイユ・ギャングの抗争で死者数を争っていた感があった。だから今回都市近郊暴動の火の手がマルセイユであがらなかったことは、私には極めて奇異に感じられたのである。

質問の第二は、近年フランスで大問題になった公立学校で回教徒の女子生徒がスカーフで顔を覆って登校してくるのを厳しく禁圧した問題である。近代国家の前提条件＝「政教分離」の問題だ。世界史上、「大」がつく革命はフランス革命（1789）とロシア革命（1917）である

が、両革命とも教会の大破壊をともなった。廃墟となった教会が遺跡として存在する風景は、ロシアだけでなくフランスの風景でもあることは、私のプロヴァンス生活で度々確認したことでもあった。国家が宗教とどういう関係をとるかということは、先進国としてのフランスが大革命以来、つねに抱えてきた問題なのである。最近、小泉首相がトルコ訪問をしたが、トルコが今世紀初めに回教徒の国でありながら政教分離の近代化(1928)を行った国であり、それが維持されてきたからこそEU加盟も展望できるということを、政教分離を定めた日本国憲法(1946)20条違反を靖国参拝でさんざん犯してきた彼がどの程度意識していたか聞いてみたい所だ。日本帝国主義のイデオロギー的道具であった国家神道=靖国神社への参拝を、中国、韓国は甚大な被害を被った侵略への無反省として非難し、政教分離違反としては非難していない。後者の非難を外国がやれば内政干渉になるからである。しかし、多くの心と意気のある日本人が訴訟を起こして争ったように、靖国の侵略性のみならず、政教分離の遵守を我々は主張せねばならず、その具体的態様につき知見を豊かにしておかねばならないのである。

質問第三でマルクにその一场景を語ってもらったレジスタンス=抵抗闘争は「言うまでもなく」と修飾語をつけたいのだが、第二次大戦のヨーロッパ戦線でイタリアのパルチザン闘争と並んでフランスで闘われた対ファシズムの民衆武装闘争である。近年の日本では、「抵抗」という言葉は、既得権益に固執して改革を妨げる守旧勢力の醜い努力という悪いイメージで使われるようになった。しかし私の大学生時代は、岩波現代叢書という形で刊行されていたレジスタンス文学の典型=ヴェルコール「海の沈黙」(この作家の名前と1944年夏にレジスタンスの戦闘が闘われた高原の名前はたまたま同じ)や、ルネ・クレマン監督の映画「鉄路の闘い」などを通じて、多くの青年が「抵抗」に憧憬していたのである。しかし時は移って、侵略は無かった、正義の戦いであったと日本軍国主義を美化する思想が大手を振ってまかり通る時代が来てしまった。日本と違って極右勢力が政権要人に就くことがないフランスでさえも、ファシズムとの闘いが忘れ去られる傾向があり、それではいけないというわけで、上記の山地ヴェルコールにレジスタンス記念館が作られている。歴史を遡っての臨場感を与えるよくできた展示が見られる小博物館である。ネットでその記念館(La Site National Historique de la Résistance en Vercors)を引くと、表紙に「次の世代がこのレジスタンスの出来事を認識し記憶するために、そしてこの国の歴史を作った人々のことを決して忘れぬために、記念館が創設された」との断り書きと以下のような詩が掲げられている。靖国神社遊就館を整備拡充した官司たちと気持ちは同じだが、方向は正反対、真っ向からぶつかるものだ。

「記憶が衰えてしまうとき、

記憶が、海の波と時の経過に蝕まれた脆い絶壁のように、

忘却の深みに全面溶解し始めるとき、

そのときは、残っているものを集めるときだ。

後になっては、それは遅すぎ手遅れになるだろう。」

---

M→S (06/08/05)

拝啓 今日日本人にとって、そしてまた全世界の市民にとって、悲痛な記念日です！みんなで頑張って、平和を救い出すための国際的正義と連帯を発展させましょう！マルク

S→M (10/08/05)

今朝、僕は背中に「9条改憲反対」、前面に「ノー・モア・ナガサキ」の看板を付けて、海老名駅頭に立ちました。今年2月から毎月9日朝に行われている抗議の政治活動への参加です。四日前、ヒロシマ・デーの酷暑の午後には、妻が原水爆反対と9条改憲反対の署名活動をいたしました。二人とも貴兄の人間性溢れるメッセージに励まされています。

昨日の日本の出来事をご存知でしょうか？ 参議院が、郵政民営化法案を大差で否決しました。郵政民営化は、日本政府の新自由主義経済政策の中心におかれていたものです。

もう一つ、僕は4月25日におきた悲惨なJR列車事故を挙げねばなりません。この事故は107名の人々（乗客106名と運転士）を殺しました。事故の主要な原因は、過酷な労働条件および安全投資の大削減です。これらは、1987年に団結権を蹂躪し組合活動家を大量解雇して強行された国鉄民営化のもとでおきました。

僕は、この鉄道事故と昨日の参院否決が、80年代から世界的規模で生活と人命を破壊損傷してきた新自由主義の衰退の第一歩となることを望んでいます※。

秋にエックスで会いましょう。敬具 房雄

(※ この希望は、参院否決で「谷底に突き落とされた気持ち」になった小泉首相が、起死回生を期して挑戦した9.11衆院選の結果、甘い期待に終わってしまった。小泉純一郎が、1933年選挙で勝利したヒトラーをなぞり、ワンフレーズを絶叫して庶民の魂を掴む戦術の大成功であった。現在進行中のホリエモンへの刑事的規制では甘い期待を持つまいと考えている次第である。)

S→M (30/11/05)

・・・(前略)・・・この機会に貴兄に三つの質問をさせて下さい。質問は相互に独立別々のものですが。

1) 最近のフランス都市近郊暴動がマルセーユでは起きなかったのは何故でしょう？ アナーキーな暴動といえばまずマルセーユで火がつきそうです。次のような命題が成立すると考えてよいでしょうか一民営化反対のために強く組織された二つのストライキ※が、自然発生的な暴動を抑制もした。

2) フランス政府が、公立学校女子生徒にイスラムのスカーフを身に着けるのを厳しく禁じる問題は解決されたのですか。僕の考えでは、遵守すべき政教分離(ライシテ)の原則は、市民個人々人に関わるのではなくて国家自身にのみ関わることです。したがってスカーフ着用禁止政策は宗教の自由への抑圧である可能性が大きいのではないのでしょうか？

3) ヴェルコールで、貴兄から青春時代の生活の一場面を聞きました。レジスタンス司令部からの散開指令に従って、ある部落に身を潜め、ドイツの装甲車のエンジン音に聞き耳をたてていたという話でした。僕に臨場感を与えるその強烈印象的な話しをもっと詳しく聞きたいです。例えばその部落をいまでも同定することはできますか。

(※ 我々がエックスに到着したとき、コルシカ地中海国営海運会社(SNCM)で労働総同盟CGT主導のストライキが既に一ヶ月続いていた。このストは成果を得ぬまま「他の形態で闘争を続ける」として収束された。続いてマルセーユ市のメトロ、バス、トロリーバスの民営化に反対するストライキがCGTほか8組合の統一闘争で行われ、われわれの帰国時にも未だ続いていた。)

M→S (30/12/05)

長いメッセージ、有り難う。今晚は、少なくともその一部分に答えるようにします。なお残るところは明日！・・・(中略)・・・僕が危うく捕まって殺される場所だった村は、ディー溪谷から遠くないエスクランです。ドイツ人たちは、その谷から朝早く登ってきました。マキ隊員のレジスタンス闘争の捜査を行い、そして再び谷に戻って陣取るためです。信じてほしいのですが、僕は自分を英雄とみなしているわけではありません。しかしこの事件については別の機会にまたとりあげましょう。「スカーフ」の問題は、込み入っており、またなおいろいろ説明する意義があります。マルセーユの二つのストについて僕が思うのは、組合がストを収束したやり方から判断して、普通の住民はストを評価していないということです。活動家たちでさえ、今回のストを一種の敗北と見なしました。CGT指導部中枢において今回ストについて特に反省する材料があるだろうと考えます。状況は1995年の状況※とは極めて違っていました。では又、続く便りは僕たちがパリに出かける前までに出します。パリ行きの日には未だ決まっていませんが。今晚、ミラボー通りのイリュミネーションが点いて、お祭りの雰囲気です！！心からお二人に、マルク。

(※ 1995年10月10日の公務員ストライキのことか?)

M→S (01/12/05)

ヴェルコール、エスクラン(君が地図の上でこの村を見つけるかどうかわからないけど)で僕が出くわした事件について。その出来事が何日だったかは記憶にないが、1944年7月初旬であったことは確かです。君に前に話したように、ドイツのヴェルコール攻撃準備を認識したフランス国内軍(FFI)参謀本部からの散開命令をわれわれは受けていました。ドイツ側の兵員数に比べて我が方がずっと少ない条件のもとで、極度に密集してドイツ側に手がかかりを与えないためにそうすることが必要でした。我々は毎日ドイツ空軍によって監視されていました。そんな次第で、僕はマキ隊員10人づつの小グループの一つに加わっていました。我々はごく僅かの食糧と装備の配給を受けた後、自然の中での生活を送っていました。ところで我々はあの日(我々は常に移動してました)その村の近くにいました。僕自身は早朝(5時頃)我々が隠れ家にしてた納屋を離れて、丘の麓の小川まで下着若干を洗濯しに行ったのです。すると突然、ディー溪谷に連なるその丘の方角からエンジンの鈍い低温が聞こえてきました。攻撃を受けやすい位置からやや上に登る余裕が、僕にはありました。そこで最大限可能な身を隠す方法は茂みに隠れることでした(その上僕は武器を持たずにいました。武器はあっても多分役には立たなかったでしょう。発砲することは自分の居所を知らせることにしかならなかったでしょう)。すごく長く感じた数分が経過後、一台の小型装甲車に護衛されたドイツ歩兵のパトロール隊と僕のグループ及び我々からそう遠くは無いう一つのグループ(そこには連合軍からパラシュートで派遣されたばかりの幹部将校が加わっていました)との最初の銃撃交戦の音を僕は聞きました。僕は双方の発砲の間で終日茂みに隠れて戦闘の終わりを待ちました。ドイツ兵が、地形にずっと詳しいマキ隊員に捕まらないように、いつも日が暮れる頃には引き揚げることは知られていました。その日、僕にはなんとそれが長く手間取っていると感じたことでしょう！僕はドイツ兵が犬を使って(奴等はしばしば使っていました)僕を狩りだすのではとの恐怖にずっと駆られていました。不安定な位置にしながら、僕は運がよかったです。暑かったその日、僕には飲むものも食べるものもなかったのですが、そのことについては考えもしませんでした。敵との接触は保持するが、だか

らといって正面から対決することはしないというマキ隊員の戦術に僕は一人離れて従っていました。ドイツ兵もまた似た戦術を採っていました。というのは、彼らの目的がマキに占められている焦点を地図の上に少しづつ描いて仕上げていくことである限りで、彼らの人数は相対的には限られていたからです。本物の戦闘よりも一時的な小競り合いが問題でした。銃火の音がもはや聞こえなくなった時、ドイツ兵が燃やしてしまったかもしれないとの懸念を抱きながら、僕は慎重に羊小屋に近づいていきました。実際、昼間にそちらの方角から煙りがやってくるのを観察していました。まもなく僕は同志たちと再会しました。同志たちは驚喜しました。僕がドイツ兵に攻撃されたかもしれず、さらに悪くすると捕まって拘引され情報を引き出されているのではないかと心配していたのです。彼らのうちの何人かが、武器を手放すべきではなかったということを穏やかに僕に気付かせてくれました。即座に適切な行動が反射的にとれるほどの十分な戦闘的精神が僕にはなかったのです。正規軍だったならば、僕はその亡失に対して厳しく制裁されたでしょう。この小事はヴェルコールにおけるマキ隊員の生活の雰囲気を少しだけでもイメージさせます。何日か経過して、ドイツ兵はグライダーとパラシュートによる大攻勢に出ました。それに先だって日夜遂行された連合軍の絵のようなパラシュート降下は殆ど何の役にも立たないことになるわけです！

M→S (02/12/05)

ヴェルコールのエピソードに続いて、「スカーフ」問題に立ち返りましょう。この問題を良く理解するためには、フランスにおける「政教分離」の歴史を少し知っておく必要があります。ただここでは、君が最小限知っておくべき部分に限って、問題の沿革をなぞることにします。重要画期の一つは、1905年の国家と教会を分離する政教分離基本法でした。この時期、「二つのフランス」ということが言われていました。聖職者のフランスと反聖職者のフランスです。第四共和政の解体の後、ド・ゴールのもとで、宗派的私立学校に有利なドブレ法が制定されました。1981年のフランソワ・ミッテランの勝利に伴って、公立学校を優遇する方向で、均衡再編が行われました。しかし左翼は、公立・私立学校の二類型を一つの統一的教育サービスのもとに統合しようとする誤りを犯しました。これが、政教分離の擁護者と宗教教育自由な学校の擁護者との間の社会的政治的緊張を、引き起こしました。政権交代のあった1984年と1994年に、デモが続きました。それからは、ある種の均衡あるいは現状維持ができました。90年代および2000年に、政教分離についての合意ができたわけです。その間に「スカーフ」事件が発生しました。つまりフランスはその時、他のヨーロッパ諸国におけると同様に、「イスラム式ヴェール」を付けた若い娘達を公立学校に送り込もうとする（女性差別が含まれる）イスラム原理主義運動の攻勢を経験したのです。約15年にわたってこの問題の解決が追求されてきました。この問題は、当のイスラム主義者たちが戦闘的態度をとるにつれて公立学校の政教分離原則を揺るがせました。2001年9月11日のあの攻撃の後、2004年に国会議員たちは「所属宗教を明示するような標識や服装の着用」を公立学校においては禁止するとの立法可決の合意をいたしました。これは、イスラム式スカーフ着用の回教徒に対してのみではなく、十字架着用のカトリックに対しても、丸帽子着用のユダヤ教徒に対しても、適用されるものでした。これは、左翼右翼※いずれの運動の側にも多くの議論討論を引き起こしました。僕自身としては、この問題を解決するのに法律を作らねばならなかったことを残念に思います。しかしよく考えてみれば、「スカーフ」がフランス的政教分離原則に反対する一種のイデオロギー的シンボルになっていた当時の状況において他のやり方で

やれたかといえば、確信はありません。最近の諸事件は、イスラム原理主義者たちが存在し、かつその勢いが増大する傾向にさえあることを示しています。僕は、ヨーロッパはこの潜在的危険に対して人権市民権尊重に配慮しつつ自己防衛をせねばならないのではと考えています。

(※左翼は日本で言う革新勢力つまり社会党共産党の潮流、右翼は日本で言う保守勢力つまりシラク大統領やヴィルパン首相の党の潮流、日本で言う右翼はヨーロッパでは極右と言う)

#### M→S (02/12/05)

また僕です。いま「ル・モンド」12月2日(金)に掲載されたフランスの「政教分離」に関する論文を読みました。大変良くできています。君に推薦いたします。それについて君がどう考えるか僕に伝えて下さい。お二人に、心から、マルク。

#### S→M (04/12/05)

拝啓 次々に到着した貴兄の4本のイー・メール(フランス語ではたしかクーリエルと言うのですね)、有り難う。これらのお手紙、そしてタヴォワイエのルモンド論文「政教分離、それがヨーロッパ」を読んで、若干お答えいたします。

1) 1944年夏のエスクランでの貴兄の危険な一日についての話しは、詩的リアリズム映画の場面ようです。その上、この話しは僕の次のような認識をより確かにするものです。すなわち、ファシズム勢力に対する第二次世界大戦の勝利は守られ維持されなければならないということです。そのファシズム勢力の一翼だった日本軍国主義は、アメリカの番犬として復活しているのが近年の傾向です。僕は次の機会に貴兄に別の一日の話しをして貰いたいです。貴兄がヴェルコールに向けてヴァランスを自転車で出発した日のことを。

なおエスクランでの貴兄の事件に関して、小さい質問一つを付け加えます。何時から武器を手放してしまったのですか。武器を持たずに小屋を発ったのですか。あるいは、身を隠すために小川を離れ登った時に、無意識に忘れて置いていったのですか。

2) 貴兄に頂いた情報で「スカーフ」問題のことをかなり理解することが出来ました。この問題は、具体的につまり歴史的文脈と現実の背景のもとで考察され分析されねばならないと考えます。イスラム原理主義の側からのイデオロギー攻撃に対抗するための「スカーフ」着用禁止は容認され必要でもあるのでしょうか。

3) マルセーユでの二つの「民営化」反対ストライキについての貴兄の評価にほぼ同意します。なぜなら、二つのストライキが何の獲得成果無しに終わらざるを得なかったからです。しかし、僕が貴兄に教えて貰いたいのは、最近のフランス都市郊外暴動の中で、マルセーユが相対的に平穏であった原因です。心から、房雄。

#### M→S (04/12/05)

君の「クーリエル」(イー・メールに対するフランスの公式訳語)に感謝します。正直言うと「クーリエル」の用語に僕は納得していません。それは、フランス語擁護を名目として、英語表現による侵略を避けるための奇妙な代用語のように思えます。この問題について、僕は厳格主義者ではありません。僕は諸言語は相互に豊かにしあう傾向にあると考えます。今日使われているフランス語が、ギリシア、アラブなどからやって来た多くの外来術語を含んでいることを忘れないようにしましょう。我々の言語は生きているのです。

君からの質問にとりあえずの答え若干を書きます。エスクランで、小川が遠くないことを知っていた僕は銃を持たずに小屋を出ました。しかしそれは間違いでした。というのは、その後ドイツ人どもが物音を立てず我々の所近くに前進できたことが僕には分からなかったからです。奇襲を試みるのが彼らの戦術でした。実際、彼らがやって来るのに通過した峠は、僕が想像していたよりもずっと近くでした。だから彼らは、僕を僕の班から切り離すことに成功したのです。しかしそれで個人一人よりも班一つの方が重要ということになったのかも知れません。僕がなぜそしてどのようにして、マキ（対独レジスタンス組織）に加わるため、自転車でヴァランスを出発したのか、いつか君に語りましょう。

マルセーユについての僕の考えはこうです。マルセーユがパリ郊外的トラブルを経験しなかったのは、この都市がずっと永く国際的であり、住民が外国人を歓迎する習慣を持っているからです。既にギリシア人を、そしてローマ人を、それから多くの諸国の人を。そのうちの旧フランス植民地の国を中心として、今日、議論がおきているわけです。こうした国際性の状況は、多数の住民のものではあれ、全ての住民のもとでそうというわけではありません。ル・ペンが彼の極右政党を拓げるために利用する人種差別主義のための余地がいつも存在しています。

また後で、パリから帰ってきたら、このメール交換を続けましょう。君たちは、歳末行事をどのように過ごしていますか。僕の知識では、クリスマスは君たちの所では金儲け主義以外には根付いておらず、僕が思い出すには東京では正月はどちらかといえばもの悲しい。それでもフランス式に「ボン・ナネー おめでとう」と祝意を交換しましょう。

ともかく、ブッシュのプードル犬に反対して勇敢にお二人で闘い続けてください。アメリカ人どもは日本に多くの基地をなお保持しているわけですから。

敬具 お二人に マルク

(以上)